

昭和二十九年七月二十五日 初版印刷
昭和二十九年七月三十日 初版發行

昭和文學全集 41
昭和短歌集
昭和俳句集



著者 窪田空穂
代表 飯田蛇笏

發行者 角川源義

印刷者 仙葉元太郎

東京都新宿區東大久保二ノ七八

發行所

株式會社

角川書店

東京都千代田區富士見町二ノ七

振替東京一九五二〇八
電話九段〇一一一〇二四

本文紙 本州製紙株式會社
タロース 日本タロス工業株式會社
整版所 中光印刷株式會社
印刷所 中教印刷株式會社

★★★

昭和
和俳句
昭和
和短歌
集

昭和文學全集
角川書店版

高木 一夫
高田 浪吉
高安 國世
竹尾 忠吉
谷 鼎
茅野 雅子
築地 藤子
對馬 完治
都築 省吾
土田 耕平
土屋 文明
坪野 哲久
土岐 善磨
中河 幹子
長澤 美津
中野 菊夫
中村 憲吉
中村 正爾
橋田 東聲
橋本 德壽
長谷川 銀作
服部 直人
花田 比露思

二六 半田 良平
二七 平福 百穂
二八 廣野 三郎
二九 福田 榮一
三〇 藤澤 古實
三一 穗積 忠
三二 堀内 通孝
三三 前川 佐美雄
三四 前田 夕暮
三五 松田 常憲
三六 松村 英一
三七 三ヶ島 霞子
三八 水町 京子
三九 宮 柊二
四〇 矢代 東村
四一 柳原 白蓮
四二 山口 茂吉
四三 山下 秀之助
四四 山下 陸奥
四五 山田 あき
四六 山本 友一
四七 結城 哀草果
四八 與謝野 晶子

一七 吉井 勇
一八 吉植 庄亮
一九 吉田 正俊
二〇 吉野 鉦二
二一 吉野 秀雄
二二 米田 雄郎
二三 若山 喜志子
二四 若山 牧水
二五 渡邊 順三
昭 和 俳 句 集
相 生 垣 瓜 人
青 木 月 斗
秋 元 不 死 男
秋 山 秋 紅 蓼
安 住 敦
阿 部 み どり 女
阿 波 野 青 畝
安 齋 櫻 魂 子
飯 田 蛇 笏
飯 田 龍 太

昭和短歌史

窪川鶴次郎

一七 一七
一八 一八
一九 一九
二〇 二〇
二一 二一
二二 二二
二三 二三
二四 二四
二五 二五
昭 和 俳 句 集
一七 一七
一八 一八
一九 一九
二〇 二〇
二一 二一
二二 二二
二三 二三
二四 二四
二五 二五

五十嵐播水	〇八	荻原井泉水	三三	後藤夜半	三五
池内たけし	〇九	尾崎放哉	三三	齋藤空華	三六
池内友次郎	二〇	小澤碧童	三三	西東三鬼	三七
石川桂郎	二二	加倉井秋を	三三	佐々木有風	三九
石塚友二	二三	桂信子	三四	佐野まもる	三〇
石田波郷	二三	加藤かけい	三四	澤木欣一	三〇
石橋辰之助	二五	加藤楸邨	三三	篠田悌二郎	三三
石橋秀野	二六	加藤知世子	三四	篠原温亭	三三
伊丹三樹彦	二七	金尾梅の門	三五	篠原鳳作	三五
伊東月草	二八	輕部烏頭子	二八	篠原 梵	三六
上野 泰	二九	川島彷徨子	二七	芝 不器男	三七
白田 亞浪	三〇	川端 茅舎	二八	島田 青峰	三八
榎本冬一郎	三一	河東碧梧桐	三〇	杉田 久女	三九
鹽谷 鶴平	三三	岸 風三樓	三三	杉山 岳陽	四〇
及 川 貞	三四	木津 柳芽	三四	鈴木 花蓑	四二
太田 鴻村	三五	喜谷 六花	三五	芹田 鳳車	四三
大谷 旬佛	三六	京極 杞陽	三六	高野 素十	四四
大谷碧雲居	三七	清原 柊童	三七	高橋淡路女	四七
大野 林火	三八	久保田万太郎	三六	高濱 虚子	四八
大橋越央子	三〇	栗生 純夫	三六	高濱 年尾	五一
大橋櫻坡子	三一	栗林一石路	三六	瀧 春一	五一
大場白水郎	三三	香西 照雄	三六	竹下しづの女	五四
岡本 圭岳	三三	小杉 余子	三六	田中 王城	五五

昭和短歌集



赤木 健介

「暮 歌」抄

生きること、吹きつける雨に濡れること、みんな愉しい、生きてゆきたい。

パスカルは「人間は考える葦」と言った。破れ葦のこの肉體は 闘う葦だ。

諦念か、いや、そうじゃない。生きることの貴さ思い、庭に種子を蒔く。

人間が人間であることを感じる日、「タツソ」を讀んで、心落ちつく。

生きているすべての人と觸れ合つて、心あたため、生きたいものを。

手を握り、言わず語らず眼を見合い、それで別れて悔のないものを。

あまりに多く、事實の波が飛沫する。われら確信す、一筋の道を。

妻よ、今日は、毛糸編むお前と火鉢を隔てて、終日、靜かに「マクベス」を讀もう。

「歸つて來た兵隊」抄

家はあるか、妻は住むかと案じつつ、むかし乗りなれた驛におりたつ。

さあ何をしようかと、昨日までの囚人、机にむかえば、「歸つて來た日」と 妻にとがめられる。

こんなにも地に低く這つたか、戦時中に著わした本を、病床で讀む。

線ふとく生きよとはげます徳田のまえに、眼を熱くして、おしだまつている。

横須賀どまりの電車をおりて、ホームに立てば、歸還兵士の群、どやどやと來る。

おたがいに呼びかわしながら、かけ足でゆく、これらの兵隊。(ああ 胸つまる思い。)

敗戦の祖國が、どんなに變つたか、君たちは知るや。物言えぬほくのくちびる。

肩をつかんで泣きさげたい、そのきもち、ぼくにもあるよ、おたがいの戦争犠牲者なれば。

ここにあなたの骨をうずめに来た、むかしの仲間、思いはひとつ、墓碑のまえに。

あなたは去り、ぼくらは生きている。何のために生きるか。眞夏の朝のひかり。

人にさきんじて死ぬといふかなしみを、ぼくらは知らねば、なおさら、あなたをいたむ。

死に近づく人は眼をとじ、息づかい荒くなりゆく、風冷える午後のこと。

左手をかざして、父のみつめるは、視力のきわみのその瞬間か。

元検事の父の一生をふりかえり、端坐し、眼をつぶる。牢獄から出てきた子は。

ぼくの不孝も、父のなやみも、歴史のうごきにつながるものと、ふりかえる二十年。

骨壺をささげて歸る道に、ふと逢つたひと、わが表情のきびしさを言う。

明治四十年、青森で生る。本名赤羽謙。出身地は長野縣。九大中退。社會運動、文化活動に参加し、伊豆公夫の別名で歴史の著書多し。昭和十年より渡邊福三らの「短歌評論」に加わり、戦後新日本歌人協會に所属。善層・沼空の影響を受けた。現在は詩サークルの指導育成につとめ、雜誌「詩運動」の編集長。歌集『暮歌』『歸つてきた兵隊』のほか、詩集『交響曲第九番』『敘事詩集』、評論『在りし日の京洋詩人たち』など。

明石海人

診断は今はうたがはず春まひる頼に墮ちし身の影をぞ踏む

妻は母に母は父に言ふわが病襖へだててその聲を聞く

幾たびを術なき便りはものすらむ今日を別れの妻が手とるも

さらばとてむづかる吾子をあやしつつつくる笑顔に妻を泣かしむ

ながらへて頼の我や己が子の死しゆくをだに背はむとす

童わが芽花ぬきてし墓どころそのかの丘にねむる汝か

癒えがてぬ病を守りて今日もかも黄なる油をししむらに射つ

更へなむ盗汗の衣にこの晝夜を癒へば透けしははそはの母は

拭へども拭へども去らぬ眼のくもり物言ひさして聲を吞みたり

くもる眼をみはりつ瞑ぢつ直心やうやくにして黙居に堪へず

晝も夜も疼きつくしてうつそ身のまなこ二つは言ひ果てにけり

惧れこそひさしかりしか言ひての今朝はしづけき囁りを聴く

別れて十年にあまるこの頃を妻がたよりはかたじけなしも

あらぬ世に生れあはせてをみな子の一生の命をくたし棄てしむ

糊口のその日その日にわが知らぬ小皺もさして嬌さぶらむ

梨の實の青き野徑にあそびてしその翌の日を別れ来にけり

子をもりて終らむといふ妻が言身にはしみつつ慰まなくに

健けきをの子の借にあり經よと言はるるもまた寂しからまし

世の中のいちばん不幸な人間より幾人目位にならむ我儕か

搜りゆく路は空地にひらけたりこのひろがり杖にあまるも

泥濘に吸はれし脊をかきさぐる言にこそはなり果てにけれ

幾たりのかたみを悶え死なしめし喉の塞りの今ぞ我を襲ふ

二十億の他人の息のかよふともただるる喉にわが息は熄む

切割くや気管に肺に吹入りて大氣の冷えは香料のごとし

かたぬ我三十七年をながらへぬ三十七年の久しくもありし

父我の頼を病むとは言ひがてぬこの偽りの久しくもあるか

すこやかに育てばまして歎かるる幼き命わが血をぞ曳く

思ひ出の苦しきときは聲にいでて子等が名を呼ぶわがつけし名を

明治三十四年濱松に生れ、中學を卒業。二十八歳の春、瀕を患ひ、各地を轉々療養の後、昭和九年長島衛生園に入園した。その頃から作歌を始め、昭和十年「水鏡」に入社したが同年八月「日本歌人」に轉じた。昭和十四年歌集『白描』を、續いて十六年『明石海人全集』を著した。昭和十四年六月、失明に續く氣管切開の後、三十九歳で歿した。



後井嘉一

ゴオガンはタヒチの島に流れけり眞實たづね
てつひに孤なりき

母の身にわがやどりける夜の怨み生れざりせ
ばあやまちなきに

惨めなる愛つきぬけてモチリアニ晝く淫賣婦
にわが救ひ見ぬ

前の世のおのが相もわからねば夜のくらがり
にわななきぬたる

おもひきり猫のあたまをぶつたたきすべなく
てわれは坐りけらしも

わが生昏くたまらぬときは錢湯に眞裸の人を
見に來りけり

わが内に神を見ぬ日ぞ焦躁す肉體ひとつおき
どころなく

物質にかかはる歎き切にして魂蔑めば生けり
ともなし

貧しさに冥むわが生をうち拓き餘しきまでに
子はよくぞ食ふ

寒夜には子を抱きすくめ寝ぬるわれ森の獸と
いづれかなしき

夢さめてさめたるゆめは戀はねども春荒寥と
わがいのちあり

禪赤く川瀬に跳ねる童らを見れば歡喜に滿ち
しわが日は過ぎぬ

四季移るあはれもなくて棲む街や身に沁む風
に秋を驚く

わが冬はさむきころの糧としも太陽ひとつ
戀しかりけり

翌る日の運命は知らず妻も吾も久遠のいのち
を生くると思へり

貧しきはおのづから國のみちにそひおし黙り
つつ生きてゐるものを

戦亂の後に來む世のすがしさを或る日はおも
ふ子を抱きつつ

國々の闊く歴史に身は生きて孤高の想ひ烈し
かるかな

焦土よりまづ民は呼ぶ戦争の慘禍ふたたびあ
らしむべからず

衣食住失ひ果てし敗戦の空白に老いてまた立
ちもせず

妻と佗ぶ罹災ぐらしにわが乳兒の笑ひ初めつ
つ春近づきぬ

ひとたむる戦禍のがれし家々に夕べ點く灯の
あたたかに見ゆ

きのふにはもどることなき太陽の光あたらし
く身を照らすかな

未來よりきよき匂ひをおくりくるここのな
かにわが子らのある

わすらるる身の傷みともあらなくに勿忘草の
種子を蒔くかな

明治三十二年十二月二十八日富山縣富岡市に生る。高
岡中學の後上京、淺草地區の小學校に現在まで音楽教
師として勤勞、少年時代より北原白秋に師事、作歌勉
勵、昭和初期新興歌人聯盟を経て藝術派短歌運動参加
後作歌中絶、昭和十三年五島夫妻の「立春」客員とし
て再起、十五年大日本歌人協會賞受賞、同年末「蒼
生」創刊主宰、戦後殆んど作歌活動なし得ず、二十八
年十一月「創生」復刊主宰、目下全歌集『河』編纂中。



生田 蝶介

ぶな若葉うぶ毛やはらに露づくに山のむかう
の朝陽けぶれり

目にふれぬ谷の大樹をひそと訪ふ小鳥の羽根
は美しからむ

山ふかく車とまりて久しけば草を結びて思ふ
ことあり

うらら陽を箱遣ひいづる蜜蜂の目玉を染めて
青き芝原

おもほえて告ぐすべもなし比良松の山のあせ
びの散るほろほろに

くだりくる人松籟の中にありかへりみすれば
夕月のかげ

谿に啼く河鹿に寒き水ならむこゑの沁むるに
胸合はせつる

池を蔽ふつつじのかげの青さより鯉は水脈を
さかのぼりゆく

わがなげきを人の腫にさびしめり水邊ま澄め
る夕かげのなか

頬の線すこしやつれて朝庭の芙蓉の花に露し
とよなり

夏もはやなごりの夜を露けきに庭の草木は月
光をまぶしぬ

かたりつつあぐる腫に夕風の海はいつしか月
夜となれり

とほどほに海荒れひびけ庭松の林に今宵月の
昏らしも

草を吹く風に鳴きたつ鳴のこゑめざめてあり
とおもひつつきく

忘れ草に似て咲く菖蒲ゆれてをり陽はすでに
雲に白光を置く

秋風の吹きすぐる時わが肩を打ちて落ちたる
松かさ一つ

われは舟に汝は岸邊にあひ見つ離れむとす
る月のさびしき

舟ゆけば月もはるばる渡るなり秋もふけたる
湖のおもてを

さりげなくよそはふ人にさりげな一夜はあけ
て山のみち葉

天に凝る秋の氣なれやひとところむらがる雲
は山をつつめり

野を遠くはなつ心のはてを知らず月ただ一つ
照り澄みにけり

とよもして雨を吹きくる山おろし仰げは雪の
嶺となりけり

浅き水にうすれゆく陽の夕かげのあはれさは
人にいふべくもなし

なにごと云はずにあればしづかなる心にあ
りと人おもはむか

よき人を心にもてばたぬしさのおのづからな
る日もありけり

明治二十二年五月二十六日、山口縣長府に生る。本名
調介。明治三十五年、京都田島家の養子となり田島曲
琴の名にて早大の頃まで「文庫」誌上に詩、小説を書
きし事あり。四十三年生田氏に戻る。早大を出て時事
新報文藝部の記者一年ついで博文館編集局に入る。
大正十四年まで在職。その頃「文藝俱樂部」「新小説」
「スバル」に小説を載せ「白樺」「文壇世界」に詩、作
品月評を書く。「演藝俱樂部」編集。大正十三年五月

歌誌「吾妹」を創刊。現在に至る。大正五年十一月處
女歌集「長旅」を出し、續いて「寶玉」「森祝」「瀟湘」
「旅人」「山歸來」「洋玉蘭」を出版。他に歌書「旅に歌
ふ」「百人一首講義」「作歌用語辭典」「日本和歌史」
等十二種を著す。他に小説集五冊あり。



石博 千亦

曇深き宗谷のせとの朝明を我がのれる船ただ
一つなり (釋本行)

夕やけの雲に連る山火事の煙はくらし船ゆす
れゆく

大方はおぼろになりて我眼には白き盃一つ残
れる

わが船のまはりいささか残しおきて狭霧とな
りぬ大海原 (金華山神)

霧の中に波白くははるかのほしる波のあたり
や陸にしまるらむ

沖遠く出でにけらしな汽笛の綱ひけどこたふ
る山びこもなし

鰯のへに白泡立てて宵月の落ちゆく方にみよ
しを向くる (長濱)

心あてにそれかと思ればそれと見えて月にか
すかなり故郷の山

夕づつは見えそめにけり船人はマストランプ
の綱ひきにけり

潮けぶり立ちも及ばぬ大空に彌彦はつ峰天そ
そりたり (佐渡 二首)

飛沫寒き荒海の上に船は在り佐渡が小島にみ
よしをむくる

秋風に蘆遠なびく尾ある人蘆生をわけて山よ
り來すや

船の軸にわかれとぶ潮のしほ先にぬけいでて
飛ぶさきがけ海豚 (津輕海峡)

いるかの腹白くかがよひ沈みゆく海の底ひを
見てゐたりけり

波はくるふ水草つきし大岩をかがのみて吐き
かがのみて吐き (北海遊)

朝びらきゆれゆれ出でし帆立曳見えがてぬか
も沖のくもりに

夏の日の直さす大野はろぼろし黄をふくみた
る青き牧草

日をさけて森に伏す羊重たげにからだをおこ
し吾をとほすも

所々刈りてつみたる草白し青々としてひろき
牧はら

大海は廣くしありけりむれ鯨潮高吹きゆたに
遊べり (北海行)

あら波のよする渚の石ころ道吾はじめての馬
の背にゆく (奥尻島)

馬をおりて徒より來れば虎杖の林をゆするあ
らき潮風

海の上の猛者の酒はがひ樂しけれゆすれなが
らも船進みゆく (青苗より彌棚)

千島の國後の島目に近し初秋の海澄みきはま
れり (尾札部より根室)

大きくうねりうねる海につき出でし岬の上の
飛飛の雲 (菫舞)

大きくゆたに黒くうねれる波のはてに光をさ
めて日の沈みゆく (利尻島に向ふ船上)

秋の日はいてりとほりて北の方オコツク海も
油風せり (利尻島鷺宿)

杵形は海よりつづく磐の道夜道危し手火させ
子ども

岩にかぶさり岩にかぶさりゆさゆさに昆布の
廣葉は波にゆらくも

昆布の葉の廣葉にのりてゆらゆらにとゆれか
くゆれ揺らるる鷗 (禮文島香深)

不二がねの雪けふらふと見るまでに淡くひかりて雲はかかれり(駿河神山)

萬まうのものみなひそまりて天地は一つの不二となりけるかも

頂はてりつかげりつ久しきを裾野この里日いまだささず

天つ日の影も及ばず大富士のみねのしら雪片あかりせり

近づくなといましめいへと呼吸いそあらずなりはせずやと顔さしよする(妻の病院より)

七人の子の行末をおもひつつ汝ながその目とはにふたがれずあらむ

目はなさずまもりてあるをいつのまにさは變りたる汝なが面わぞ

おとろへてかはりはてつと思ひしより幾かはりせし今日けふの面わぞ

今にしてつくづく思へばありし世は吾おろそかに思ひてありけり

母あらずなりにし後の末の子はみどり子なしに膝かたになるも

我が家を焼く火におはれのがれゆくゆく手にもあかく焰ほあがれり(大震劫火)

子らをば草の上に臥させ八方にとどろき燃ゆる火中くわにたてり

打よりにバナナを食めば笑みながら妻も來るかかと思ひけり

船の上の曉闇のおぼつかかな母がねむれる山も見えなく(故郷へ)

頂に烟なづさふ火の山のめぐりの海は黒くをどめり(櫻島 二首)

もろはりに海に裾ひく火の山にただにむかへり暮るる峠路

横綱の手の型といふ墨刷にわが手をのせて寂しく見にけり

水田かく水牛がくればすこしとびすこしとびさきは遠くへは飛ばず(臺灣)

支那海の雲を背にして柱なす直立ちし虹は片くづれせり(基隆より神戸へ)

天つ風吹き立ちぬらし飛行機の翼に觸れてゆく雲のあり(札幌より羽田へ飛行機にて歸る)

機首にむかひひたすらなりし飛行士のふと横むける鋭き眼の色

沈まず覆らざるすくひ船のキールを今日も又一つ握り(救命艇)

燃ゆる血の赤き浮輪の旗あれ狂ふ嵐を截りて海に進みいづ

満身に浴びたる潮をしたたらし難船をひきてかへる救命艇(救命艇)

わが一生遂にささげぬ天の下ここだの船を人を救ふと

苦しびに堪へむけものの叫かと海霧うらの中なる汽笛をききぬし(無題)

この船にあらむ汽笛もしきりなれり海を蔽へる霧ふるはせて

いづこにか霧笛の聲のひびかひてさ霧のほか何物もなし

山を迷ひし時鳥かもあかつきを濱松原になきくだる聲(昭和十七年七月)

曉昏し路かもわかぬほととぎす山にかへらず濱にてぞなく

二月をこやりつづけてふと見れば秋の雲白く空に光れり(八月二十日最後録)

明治二年一昭和十七年。七十四歳。愛媛縣に生る。本名辻五郎。石博家を嗣ぐ。琴平の明道學校に國文を學ぶ。明治二十二年上京。帝國水難救濟會創立に參與し終生一貫勤続五十年をこえた。つとに作歌し落合直文正岡子規にも批評を乞うたが二十六年信綱門に入る。四十一年「心の花」創刊。新派和歌革新の道を進み、四十年間その主筆。公務の性質上足跡全國にあまねく北海道の旅三十數回。海の歌人として知られた。歌數數萬首。歌集『潮鳴』(大正四年)、『鷗』(大正十年)、『海』(昭和九年)のほか未刊。



石原 純

A

春淺く みどり芽ごもる樹肌さむし。雪やま
とほく 空にひかれる。

日のぬくみ 枯草原にしみとほる 丘の頂き
ゆあをき空みる。

研究室ひたひそまりて ころろふかく落ちあ
るがうれし。冬の休み日。

眼を披きもの見ざりけり。我れはいま 電子
のまはる機想ひゆる。

美しくしき敷式があまたならびたり。その尊さ
になみだ滲みぬ。

ゆふべ霽しろさはてなし。枯原をひとりあゆ
めればともし。我が生は。

雪はらを我がたどり來つ。蒸氣だてるくろき
ながれに ぬくみをおぼゆ。

向學のよろこびに浸り、ひねもすを部屋には
こもる 其の日續けり。

あなたには秋知らぬさまに人のある。あまた
の家のありと思へど。

泥むにはあまりにおもき秋空ゆあ 背きもし
ぬる人のさまかも。

息づけば、想なき胸をさす如く 空氣の流れ
沁み入りにけり。

電燈の球いちじろく黒く見えぬ。我れの心の
瘦すを覺えて。

ひむがしの山に立ちある 白樺のひとつ木と
もし。月黄ばみのぼる。

吾木香 くらずみふかくさくゆゑに 我れは
山原をともしみにけり。

乳こぐさ白きを摘みて ゆふちかきたか原の
うへに 路をもとめぬ。

眞夏日のくもりなやまし。午後の日を藪ぐさ
ぬるめる いろいろみわたる。

我が二人 船のへさきに坐りある。いろいろみ
うへのくもりは落ちず。

くもり日を藻の浮く海のたひらかに ほとほと
とはしる。しろき汽船は。

潮にぬれ しろき土質のあらはれし 鳥山の
うへ松生ひにけり。

坂にそひて立つ石塀の斜面ながし。おも向け
てとほく來しかたをみつ。

病むひとの車のあとゆ我があゆみ、山路はさ
びし。ゆふべ陽あかく。

しろき汚染窓のがらすにじみつ つ 春日は
にこる。うつしさもなく。

埃しらむひろき巷に ゆふべひと水まきある
も。風たゆく吹き。

さくら草花ふたつ開き ひと去なむ日を告ぐ
ることし。對きてさみしも。

きみに逢はず久しと思ひ、羊齒の葉の伸びゆ
く朝を ひとりさびしむ。

砂はまに貝をひろへり。まがなしきいのち足
りゆく 度しみごころ。

飛びがたく枝にとまれる もずの子のくちば
しは愛し。しきりに鳴けり。

鴟の子は駢りてちさし。籠にいれて、ひとの
育くめば生きがたきかも。

つちのしたにいで湯わくなり。我がいのち愛
しさをもちてとはに生くべく。

我れに来むさびしきことを ひそかにもこの
夜はおもふ。はやく寐ねつつ。

しみじみとこころ泣きたり。ひととゐて、い
ひ解きがてぬさびしさをもち。

わが病めば、こころかなしく來しひとを わ
れを離れてかへすべからず。

雨ふれば春ながらさむし。くろずめる櫻のみ
きのわびしくも立ち。

梅雨の日はそらに翳あり。相ならび汽車にす
わりゐて 曇りをおそる。

海ちかき この岩山の岩間に 湯むろはつく
りひと湯浴むらし。

B

藍のほろにがさ、若荷のふしぎな味ひ、そん
なものを私もいまは好くやうになつた。

禪心を読むやうな 水仙の花だ。草土手に
しろく黙つて對きあつてる。

土も凍る。だが、野外の經を誦するのだ。
このしみじみと寒いゆふぐれ。

沈黙は たつといのだらうか。あのひそかな
松の實が落ちてゐる。

丘陵の高低線がなびく。焦點がぼやける。あ
かい花梗が揺れてゐる。

なぜ木々の芽が 紅みを帯びてゐるのかを考
へながら、何かに觸れたいところがおこる。

ひとびとよ、いのちを惜しめ。無はまさに眞
黒である。

新たな空が日毎に生れるのに、きのふのここ
ろを なぜ哀しくも嘆くのだ。

この海峡をとほつて 大小の船があちこちに
動いてゐる。みんな秋を運んでゐるんだ。

帆柱と帆綱とが あまたの縦線を劃して、い
ま、ゆふ焼のそらに 海港の風景を描く。

しづかに、海峡をながめてゐると、夜は、こ
の國土がながれ動くやうでもある。

黒と白と、にんげんのこころの なんとといふ
さびしい隔たりだ。

眞空が——おそろしい眞空が わたしの眼の
まへに ぢつとひろがる。

ふしぎな 四次元の世界を想描する。しづか
な ひとりの書齋である。

肩と脣とがふるへる。かくて、微風が かす
かに水銀の面をかすめた。

ほつそりと瘦せた素顔、ロマンチックな眞實、
さて、けふも明日も宇宙は廻轉する。

冬は、樹氷帯のうつくしさにあこがれ、また、
その冷たさに失望する。

安價な演藝場の小屋わきに 競賣屋が聲をか
らして、春の空氣に渦動が溢れる。

眼を借りて、眼を貸して、お互ひはこころの
寂しみを 見ようぢやないか。

やがて蘇へるいのちをもつて、蟲が土にねむ
つてゐる ひそましい冬だ。

凹みのおほい とがつた曲線に 生れながら
の悲觀癖がひそんでゐるんだ。

陶器の白さには 何かしら觸れにくい、背す
ぢがひよつと寒くなつて。

水に濡れた皮膚を砂に埋めながら、幾何曲線
を でたらめに占つてゐる。

優曇華が開いたといふ。齒がみんな蝕まれ
て、一つの黒い空間を 眼に漂はしめる。

明治十四年一昭和二十一年。六十六歳。明治三十九
年 東京大學理學部物理學科を卒業。大正三年、
東北大學理學部教授となり、理學博士。はじめ伊藤左
千夫に師事して、「馬酔木」に投稿。明治四十一年「ア
ラギ」創刊と共に、これに参加。大正十二年、自由
形式による短歌を主張。それから、「瀟々星雲」三角
洲「短歌創造」「立像」「新短歌」を順次刊行して、
新短歌の理論と作品とを發表。アラギ時代の短歌集
『晝日』と、第一書房の短歌文學全集の一冊、『石原
純篇』とがある。